

## 抄 読経意趣

先輩諸師のご指導・ご叱声をお待ち申しております。

### 一．題意【第一案】

ア)浄土真宗は、本願力廻向の二回向四法の法義であって、往因は、念佛往生の願に何らの疑いを介在させない(疑蓋無雑の)信心一つで定まる。

イ)しかして、読経は、五正行の前三後一の助業の一として、大行たる称名を助け伴となる。

ウ)尚、葬儀・法事の実際で営む「読経」は、行者にとって、決して、往生・成仏の為の追善・供養の行業ではないものの、読誦された經典の功德は、聞く者に普く不退転の功德が回向される。

### 二．出拠 凡例：註 注釈版聖典、全 真宗聖教全書、新全 浄土真宗聖教全書(2011年3月25日初版)

#### 「仏説無量寿経」の文

##### ・1)「弥勒付属」の文(Ref 注釈版聖典 P81、全 -P46)

・「たとひ大火の三千大千世界に充滿することあらんも、かならずまさにこれを過ぎて、この経法を聞いて歡喜信樂し、受持読誦して説の如く修行すべし。ゆゑはいかん。多く菩薩ありてこの経を聞かんと欲すれども、得ることあたはざればなり。もし衆生ありてこの経を聞くものは、無上道においてついに退転せず。このゆゑにまさに専心に信受し、持誦し、説行すべし」と。

##### ・2)「得弁才智の願(第29願)」(Ref 注釈版聖典 P20、全 -P11)

・たとひわれ仏を得たらんに、国中の菩薩、もし経法を受誦し諷誦持説して、弁才智を得ずは、正覚を取らじ。

#### 「無量寿如来会」「弥勒付属」の文(Ref 全 P 212) 大經と同趣旨

・今此の法門を汝に付属す。当に愛樂し修習すべし。乃至一昼夜を経るも受持し読誦して希望の心を生じ大衆の中に於て他の為に開示し当に教巻を書写し執持して導師の想を生ぜしむべし。

#### 「仏説觀無量寿経」

##### ・1)「散善顕行縁」(Ref 注釈版 P92、全 -P51)。

・かの国に生ぜんと思はんものは、まさに三福を修すべし。  
一つには父母に孝養し、師長に奉ご事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。  
二つには三帰を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯さず。  
三つには、菩提心を発し、深く因果を信じ、大乘を読誦し、行者を勧進す。  
かくのとごきの三事を名づけて浄業とす」と。

[注意点]自力を捨てるからといって三福を捨てるわけではないことに留意しなくてはならない(Ref 梯 実圓「すねいる觀経講讃」)

##### ・2)「上品上生品」(Ref 注釈版 P108、全 -P60)。

・また三種の衆生ありて、まさに往生を得べし。なんらをか三つとする。一つには慈心にして殺さず、もろもろの戒行を具す。二つには大乘の方等經典を読誦す。三つには六念を修行す。  
回向発願してかの国に生ぜんと思はず。この功德を具すること、一日乃至七日してすなはち往

生を得。

天親菩薩『十地経論』「利供養、敬供養、行供養の三種の供養」の文

信楽峻磨（1997/3/30）本願寺監正局での法話<http://www.saikyoji.net/sigaraki-sishagirei.htm>

『観経疏』

・1)「序文義 発起序 散善顕行縁」(Ref 七祖註釈版 P387、全 P493)

「読誦大乘」といふは、これ経教(きょうきょう)はこれを喩ふるに鏡のごとし。しばしば読みしばしば尋ねれば、智慧を開発す。もし智慧の眼開けぬれば、すなはちよく苦を厭ひて涅槃等を欣楽(こんぎょう)することを明かす。

・2)「散善義 就行立信(じゅぎょうりっしん)釈」(Ref 七祖註釈版 P463、全 P537)

次に行に就きて信を立つといふは、しかるに行に二種あり。一には正行、二には雑行なり。正行といふは、もっぱら往生経の行によりて行ずるは、これを正行と名づく。何者かこれなるや。一心にもっぱらこの『観経』・『弥陀経』・『無量寿経』等を読誦し、一心に專注してかの国の二報莊嚴を思想し観察し憶念し、もし礼するにはすなはち一心にもっぱらかの仏を礼し、もし口に称するにはすなはち一心にもっぱらかの仏を称し、もし讃嘆供養するにはすなはち一心にもっぱら讃歎供養す、これを名づけて正とす。

またこの正のなかにつきてまた二種あり。一には一心にもっぱら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず念々に捨てざるは、これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるがゆゑなり。もし礼誦等によるをすなはち名づけて助業となす。この正助二行を除きて以外の自余の諸善はことごとく雑行と名づく。もし前の正助二行を修すれば、心つねに(阿弥陀仏に)親近して憶念断えず、名づけて無間となす。もし後の雑行を行ずれば、すなはち心つねに間断す、回向して生ずることを得べしといへども、すべて疎雑の行と名づく。ゆゑに深心と名づく。「無間」 絶え間のないこと、「間断」 途絶えることをいう。

・3)「散善義 上品上生釈 読誦大乘」(Ref 七祖註釈版 P471-2、全 -P542))

「二には、読誦大乘を明かす。これ衆生の性習不同にして、法を執ることおのおの異なることを明かす。…(中略)…次に第二の人は、ただ読誦大乘をもって是となす…(中略)…すなはち上の第三福(行福)の第三の句に「読誦大乘」といへるに合す。

『歎異抄』第5条 (Ref 註釈版聖典 P834、全 -P776)。

「親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏したること、いまだ候はず」

三 . 釈名 : 「釈名」とは、名目(教義概念)を解釈する意、教義概念規定をいう。文言の定義である。

「読経」とは、経を読むことをいう。「意趣」とは、意義、趣旨をいう。

「読誦正行」とは、善導大師の散善義に説かれる五正行の一で浄土の經典を読誦することをいう(Ref 註釈版巻末註 P1484)。

「読誦」の「読」とは、經典の文字を見て声を出して読むことをいい、

「誦」とは、文字を見ないで声を出して読むことをいう(Ref註釈版巻末註 P1523)。

大乘經典を読誦することを「**読誦大乘**」といい、浄土教では、「浄土經典を読誦すること」を「**読誦正行**」といい、それ以外の經典を読誦するのを「**読誦雜行**」という。

「**諷誦**」とは、諳んじて節をつけて読むことをいう。

「**五正行**」 善導大師の散善義に説く浄土往生の行業をいう。

- ・ 読誦正行
- ・ 觀察正行 心を静めて阿弥陀仏とその浄土の姿を觀察すること。
- ・ 礼拝正行 阿弥陀仏を礼拝すること。
- ・ 称名正行 阿弥陀仏の名号を称えること。
- ・ 讚嘆供養正行 阿弥陀仏の功德を誉め讚え、衣食香華(えじきこうげ)を捧げて供養すること。

**正定業と助業**(註釈版巻末註)

・「**正定業**」 善導大師は、称名正行を本願の行であるから正定業(=まさしく衆生の往生が決定する業因)とされる。

・「**助業**」 善導大師は、読誦・觀察・礼拝・讚嘆供養の四行業は、称名の助けとなり伴となる行業であるから助業というたされた。

「**利供養**」とは、仏徳を讚嘆すること、

「**行供養**」とは、法要に列なつた僧俗が他力念仏のご縁を深めさせて戴くことをいう。

#### 四．義相<sup>ぎそう</sup>

##### (一)通義

自身教人信(自行化他)の意

「往生礼讚」「信巻-真仏弟子釈」(Ref 註釈版 P261、全 -P77)「化身土巻-真門釈」註 P411、全 P165、七祖註釈版 P676、全 P661)。

たまたま希有の法を聞くこと、これまたもっとも難しとす。みづから信じ、人を教へて信ぜしむること、難きがなかにうたまたまた難し。大悲弘くあまねく化するは、まことに仏恩を報ずるに成ると。(Ref「教行証文類」「信文類 真仏弟子釈」註釈版 P261、「化身土文類 真門釈」註釈版 P411、「往生礼讚」「初夜讚」七祖註釈版 P676)

・「**自身教人信**」とは、阿弥陀仏の本願の救いを自分も信じ、他人にも勧める。善導大師以来、念佛者の姿勢として示されたもの。他人にも信を勧める教化が阿弥陀仏への報恩となる(Ref 註釈版聖典巻末註)。

・「**自行化他**」とは、自ら仏教を信じて実践し、他の人を教化して仏道に入らしめることをいう(Ref 註釈版聖典 P934、P1213 脚注)。・「**自行**」とは、自分の為にすることをいい、「**化他**」とは、他人を化益することをいう(Ref 註釈版聖典 P1128 脚注)。「**行者を勧進す**」は、散善顕行縁にも示された通りである(Ref「観経」註釈版 P92、全 -P51)。

(Ref「改邪鈔」註釈版聖典 P934、「御文章」二帖第 12 通 P1128、「夏御文」第 2 通 P1213、「選撰集」後述 P1292)。

追薦(善)・供養の意：備考：追善は追薦の俗用である。

【論点】読経には、追善供養の効果ありや否や？

1)【通義】・「追善・供養」とは、死者の冥福のために営む後から追って実践する善事(供養)をいう(Ref 中村元「仏教語大辞典」)。

・一方、読誦された経を聞くものには、不退転の功德が回向されている(大経、弥勒付属の文)。のであるから、読誦主体の意思を越えて、追善供養の効果が齎されるというべきである。

2)【親鸞聖人】・「親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏したること、いまだ候はず。……わがちからにてはげむ善にてもさふらはばこそ、念佛を回向して、父母をもたすけさふらはめ。(Ref「歎異抄」第 5 条、註釈版聖典 P834、全 P776)。

浄土真宗では、往生人にとり、念仏は、自力ではげむ善ではなく本願力廻向の大行であるから、父母の教養の「ため」という目的意識で努めるとその趣旨に違背するからである。

## (二) 読経の経意

### 1. 「仏説無量寿経」の文

・1)弥勒付属の文(Ref 註釈版聖典 P81、全 -p46)。

「たとひ大火の三千大千世界に充滿せることあらんも、かならずまさにこれを過ぎて、この経法を聞いて歡喜信樂し、受持読誦して説のごとく修行すべし…(中略)…もし衆生ありてこの経を聞くものは、無上道においてついに退転せず。このゆゑにまさに専心に信受し、持誦し、説行すべし」と

「受持読誦」ながくたもつ(Ref「聖典意訳(口語訳)P110)、「持誦」読誦(Ref 同 P111)。

【論点】無上道において退転せずとは、彼土・此土いずれにおける事態か

論題「正定滅度」に示したごとく、此土における事態である。

考察：「無常涅槃」は、煩惱が完全に消滅し、智慧と慈悲が完成し、自利利他の徳が円満したこの上ない悟りの境地であるから、彼土の事態であるのに対して、「無上道」とはそこに至る道行き、過程を指すので、今生での事態として差し支えが無い。

・2)得弁才智の願(第 29 願)(Ref 註釈版聖典 P20、全 -p11)。

「たとひわれ仏を得たらんに、国中の菩薩、もし経法を受讀し諷誦持説して、弁才智を得ずは、正覚を取らじ。」

「弁才智」自由自在な理解力及び言語表現能力(「四無碍智」)をいう(Ref 註 P20、脚注)。

「四無碍智」とは、仏の自由自在で障りなき理解表現能力のことをいう。「四無碍弁」ともいう。

・ 法無碍弁 すべての意味をよく表す文字に精通する。

・ 義無碍弁 文字に含まれた意味内容に精通する。

- ・ 辞無碍弁 すべての言語に精通する。
- ・ <sup>ぎょうせつむ げべん</sup> 樂説無碍弁 衆生の欲するところに従って説法するの自由自在であることをいう。

### 【論点】「得弁才智」の功德の及ぶ範囲について

- ア)「国中の菩薩」の文言上は、彼の土の菩薩(浄土真宗では広門示現の菩薩)を指す。
- イ)しかし、得られる功德は「弁才智恵」であるから、第十八願・同成就文を踏まえれば、現生の不退転地の範囲で、また、観経疏の「鏡の喩え」で謳われた功德にも通じるところから今生にも及ぶと見るのが相当である。

## 2. 「観経疏」「序文義」発起序 散善顕行縁

「読誦大乘」といふは、経教は、これを喩ふるに鏡の如し。しばしば読みしばしば尋ねれば、智慧を開発す。もし智慧の眼開けぬれば、すなはちよく苦を厭ひて涅槃等を欣樂することを明かす(Ref 七祖註釈版 P387、全 P493)。

鏡によらなくては、自らの姿の映像が見られません(Ref 龍樹菩薩「宝行王正論」P238(33))。

### 【論点】「経教は、これを喩ふるに鏡の如し」とは、

- ・「鏡」は、光の働きによって、ものを映し出すという機能を有している。
- ところが、「鏡」は昔は青銅等の金属製で、磨き続けなければ姿を映すことはできなかった。だから、「鏡の如し」とは、
- 一つには、経教は、手を抜かずに読み続けるということに一つの意味が存する。  
衆生の三福の一を構成する行い、プラクティスであり、自力だとして捨ててはいけない。  
三福は、専修念佛の助縁として示されたものだからである(Ref 広瀬「観経四帖疏講義」第8章 P563)
  - 二つには、ものを映し出すという鏡の働き(機能)に関して、何によって何が明らかにされるのであるかが課題となる。

弘願門(第十八願文)は、如来の正覚と衆生往生が一体に誓われてあるから、如来の智慧と往生成仏する主体たる衆生の姿がその対象となる。

したがって、映し出されるのは

- ア) 一つには、如来の智慧の働き(光如来とも称せられる弘願の法)であり、
  - イ) 二つには、その救いの対象たる衆生(私)の姿であると解することができる。
- 如来の智慧の働きは、それ自らが鏡に映し出されるというよりは、仏智によって如来の救いの目当てたる衆生(私)の姿を映し出す働きの体であったと窺われる。
- 如来の智慧の鏡なかりせば、衆生には、救いの対象たるわが姿が見えないからであった。
- 「散善義-上品上生釈」(Ref 七祖註釈版 P473、全 -P543)。に次のような言葉がある。

「われら凡夫、すなはち今日に至るまで、虚然として流浪す。煩惱悪障は転々して益々多く、福慧(六波羅蜜の「智慧」のこと)は微々たること『重昏(=暗闇)を対して明鏡に臨むが如し』」

これは、一つには、智慧そのものが映し出される対象であることを物語っており、

二つには、如来の智慧の光なかりせば、明鏡も機能しないことを物語っている。

だから「鏡の如し」というからには、如来様の光明(智慧)の働きによって、智慧そのものも賜る(本願力廻向)事を物語っており、同時に、衆生自らの姿があからさまに映し出されることを喩えたものと解することができる。端的に言えば、二種深信を賜るといことができる。

・「尋ねる」とは、問うことであり、「問う」とは、門の前へ行行って大きな口を開けて尋ねることが大事であることをいう(12/4/19 大田利生「三経七祖」)。

・「散善」の一門は、これ仏の自説( 随自意)なり(Ref『観経疏』『玄義分 定散門』七註版 P306)。

・三福・九品を名付けて散善となす(Ref『観経疏』『玄義分 定散門』七祖註釈版 P307-8)。

註:三福と九品の関係 「三福」を開いたものが「九品」である。

(註)「散善顕行縁」 善導大師が三福を「散善顕行縁」とされたのは、「三福の経文は、実は、専修念佛という行を明らかにする助縁として語られたのだ」という意味である。

Ref)『観経』『散善顕行縁』には、「かの国に生ぜんと欲するものは、まさに三福を修すべし」としてその内容が説かれており、その末尾に「大乘を誦誦し、行者を勸進す」とある(Ref 註釈版聖典 P92)。「勸進」とは、人を勧めて仏道に入らしめることをいう。

### (三)報恩行(略讚・広讚)の意

『往生論註』讚嘆門釈の文(Ref 七祖註釈版 P102、全 -P313-4)

・「いかんが讚嘆する。口業をもって讚嘆したてまつる。「讚」とは讚揚なり。「嘆」とは歌嘆なり。讚嘆は口にあらざれば宣べず。ゆゑに「口業」といふなり。

『往生礼讚』前序「口業讚嘆門」の文(Ref 七祖註釈版 P654、全 -P648-9)

・『観経』に説き給うふがごときは、三心を具してかならず往生を得。なんらをか三となす。一には至誠心。いはゆる身業にかの仏を礼拝し、口業にかの仏を讚歎称揚し、意業にかの仏を専念観察す」

『往生礼讚』前序「起行」の文(Ref 七祖註釈版 P655、全 -P649)

・また天親の『浄土論』にいふがごとし。もしかの国に生ぜんと願することあるものには、勧めて五念門を修せしむ。……何者をか五となす。……二には口業讚嘆門」

『散善義』就行立信釈「一心専読誦」の文(Ref 七祖註釈版 P463、全 -P537)

・何者かこれなるや。一心にもつぱらこの『観経』・『弥陀経』・『無量寿経』等を誦誦し、一心に専注してかの国の二報莊嚴を思想し観察し憶念し、もし礼するにはすなはち一心にもつぱらかの仏を礼し、もし口に称するにはすなはち一心にもつぱらかの仏を称し、もつぱら讚嘆供養するにはすなはち一心にもつぱら讚嘆供養す、これを名づけて正となす。

『尊号真像銘文』『智栄讚善導別徳云』の文(Ref 註釈版聖典 P655、全 -廣本 P587)、

・「即嘆仏」といふは、すなはち南無阿弥陀仏をとふるは仏をほめたてまつるになるとなり。

**【論点】化他の報恩行は、讃嘆行であり仏化助成となるか？**

- ア)「読経」は、化他の報恩行であり、仏徳讃嘆の広讃に該当し、称名を助ける。  
読経すれば、自然に「称名」を促す。
- イ)「広讃」は、第十七願成就文の名号讃嘆に当たる。
- ウ)成就文の名号讃嘆は、衆生の聞其名号(化他)をもたらすからである。

**(四)助業は自力か**

『一念多念証文』「16」(Ref 註釈版聖典 P 688、全 -P614)

- ・また助業をこのむもの、これすなはち自力をはげむひとなり。自力といふは、わが身をたのみ、わがこころをたのむ、わが力をはげみ、わがさまざまの善根をたのむひとなり。

**【論点】助業は、自力か否か？**

- (結論)助業そのものは自力ではないと解する。
- (理由)出拠は「これをこのむ」場合を自力とするからである。

**五．結び又は題意(【第二案】)**

読経は、天親菩薩の示された三種の供養に依れば、

仏前を莊嚴し(利供養)、 仏徳を讃嘆し(敬供養)つつ、 仏道を行ずる(行供養)趣旨。

また、読経は、善導大師の示された「五正行」のうち、称名正定業を助ける前三五一の「助業」の一に相当する。

しかして、浄土真宗は、疑蓋無雜の姿で(=信樂)大行を行ずること一つで聞名の救いに与る法義であるから、読経は、大行の場を提供し、これを助ける点に意義がある。

行者にとっては、決して、往生・成仏の為の追善・供養の行業ではないが、読誦された經典の功德は、それを聞く者に自づから回向されると解する。

以上